

SSKP

船橋障害者自立生活センターニュース

2000年1月17日発行 第32号



編集: 船橋障害者自立生活センター事務局

〒273-0011 船橋市湊町1-6-12

郵便振替「00140-9-609088」

TEL: 047-432-4554 FAX: 047-432-4565

URL: <http://www02.u-page.so-net.ne.jp/wb3/wave-fil/>

E-Mail: wave-fil@wb3.so-net.ne.jp

明けましておめでとうございます

Y2K問題で不安のうちに迎えた2000年ですが、皆様はどんなお正月をお過ごしでしたでしょうか。

新しい年を迎え、私たち事務局スタッフ一同も気分も新たに毎日の活動に追われています。

去年は、24時間テレビから寄贈を受

けの開始、バリアフリーのマップづ

りティー絵画展の開催、介護保

険シンポジウム等々、めまぐるし

も2月には公的介助制度の

介護保険や基礎構造改革など、

講演会など、重要な行事が続



けたリフトカーによる移送サービ

ス、新事務所獲得に向けたチャ

レンジとNPOをテーマにした二回の

シンポジウムと、いばかりの一年でした。また、今年

のシンポジウムと、介

護保険や基礎構造改革など、

これから福祉政策の方向性を学ぶ

しかしながら、その一方で慢性的な介助者不足や、財政的に不安定な状況は依然として続

いており、また、新事務所開設も目途が立たない状態で、いくつもの課題を残したままの年越

しとなりました。

今年は、来年の設立10年という節目の時期に向けた大切な足場固めの時期になると思

います。

今年も皆様のご支援をよろしくお願いいたします。

介助制度を考えるシンポジウム ご案内

私たちのセンターも来年で発足十年を迎え、少しずつですが、自立生活をはじめの人や、それにむかって準備をしている人が増えてきています。

しかしながら、自立生活を支える介助の問題を考えた時に、公的な制度がほとんどと言っていいほど整備されておらず、その点で不安を抱えたままの人も少なくありません。

全国的に見渡せば、いろいろな制度を創設して24時間に近い介助保障が行われる自治体も出てきています。そこで、当センターでは長い間介助保障の運動に携わっている川元さんと、全国自立センター協議会で介助委員会の責任者をなさっている横山さんにおいて頂いて、私たちにとって望ましい介助制度はどのようなものなのか、また、そうした制度はどうしたら実現できるのかを考えるシンポジウムを開催することになりました。

自立生活の基本となる介助の問題を原点に戻って、ご一緒に考えてみたいと思います。ぜひ大勢の皆様のご参加をお待ちしています。

記

タイトル:介助保障の充実をもとめて

日 時:平成12年2月5日 午後1時半～4時半

場 所:船橋市女性センター 研修室

参加費:無料

パネラー紹介 (発言順・敬称略)

- ・ 川元 恭子(自立生活センター小平 代表)
- ・ 杉井 和男(自立生活センター WAVE ふなばし 事務局長)
- ・ 横山 晃久(自立生活センター ハンズ世田谷 事務局長)

司会

- ・ 山本 明 (自立生活センター WAVE ふなばし 副代表)

以上

追伸

なお、事前に問い合わせ等がございましたら、お電話ください。

自立生活センター WAVE ふなばし Tel047 432 4554

講演会開催の御案内

日ごろは当センターの活動に何かとご支援いただいていることにお礼申し上げます。お蔭様で今年は発足九年目を迎えることになり、より実のある活動をしたいと存じていますが、ついでには下記のような要領により、森山幹夫講演会を開催いたします。

この講演会は、厚生省社会援護局施設・人材課長の要職にある森山氏をお招きして、

大きな転換期を迎えている社会福祉の現状とこれからについて、厚生行政の中枢にある人々はいま何を考えているのか、何をどう変えようとしているのか、率直にお話していただく企画です。

森山氏は前に県の障害福祉課長を二年あまり努められたことがあり、千葉県事情にもくわしいと思いますし、年金問題などにも精通しています。介護保険の実施が目前になり、さらにいわゆる社会保障基礎構造改革の<措置から契約へ>という変化の中で、これからの福祉、とりわけ私たち障害者の福祉はどうなっていくのか、先行き不透明な不安の大きい現在、森山氏のお話はナマの情報に接することができるという意味で、期待に応えるものになるだろうと存じます。

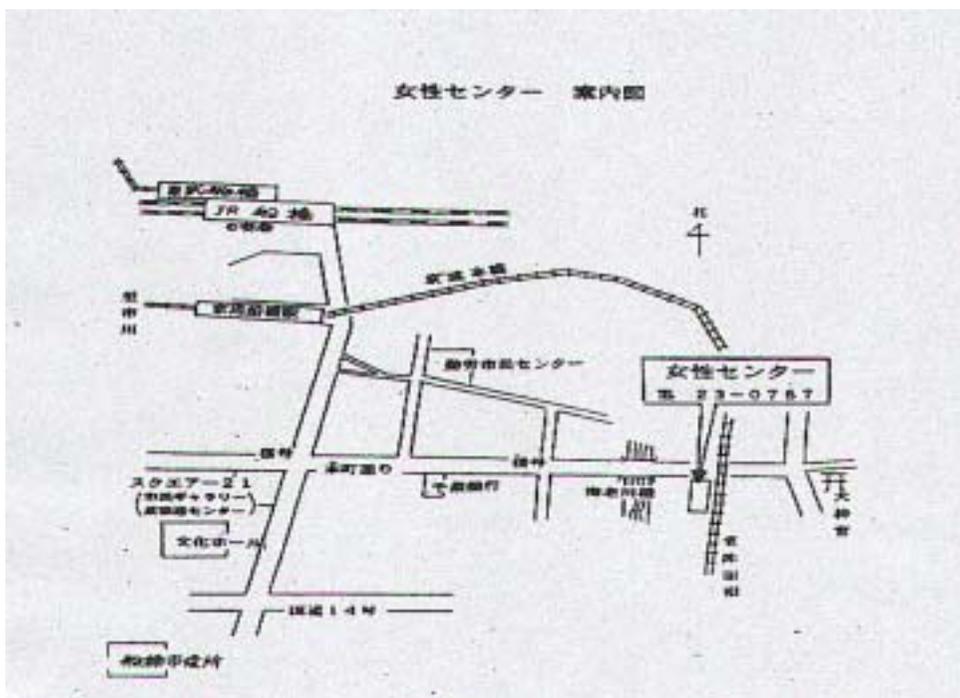
当日はお話の後、質問に答えていただく時間もつくりますので、ご関係の皆さんにもお広めの上、ぜひ、大勢ご参集くださいますよう、ご案内お知らせ申し上げます。

記

日時 平成12年2月26日(土) 13:30~16:00
会場 船橋市女性センター研修室 (047-423-0757)
講師 森山 幹夫氏(厚生省施設・人材課長)
参加費 無料
主催 船橋障害者自立生活センター(Waveふなばし)
申し込み・問い合わせ先 Waveふなばし相談室
047-495-6777 Fax047-495-6776

以上

両イベント共、会場はココです。



特別連載

私らしい生活の実現を目指して(8)

渡辺 由美子

社会が私を見る目

最近、電動車椅子で通勤をするようになり、一人で電車に乗ったり、買い物をしたりするようになりました。そんな時、世の中の人はいったい私をいくつに見るのか知りませんが、私に言わせれば誠に不可解な出来ごとにくつも遭遇します。例えば、私にはいつも保護者がついていてと思いこんで、物を言っている人があまりにも多い事に驚きを感じます。

車椅子の回りをぐるりと一周して後ろを振り返り、全然関係の無い人を無理やり保護者にしたりします。また、お金を使うときに、両親に相談してから買わなくて良いのかと問いかける介助者もいます。そんなに高価な宝石を買おうというわけではありません。ごく日常的と判断される買い物です。それから食料品売り場に介助者やガイドヘルパーさ

んと行くと、私が食べ物を買おうとしているのに、ヘルパーに「これを買ってあげなさい」とか「これはおいしい」とか説明して、店員さんは私には一切聞いてくれないというような体験をたびたびします。何時まで経っても社会が体が不自由というだけで、まともな大人としての扱いをしてくれません。これはいったいどのような社会の人々の意識の現れなのでしょう。もうすぐ三十路を迎えようという女性として、きちんと位置付けられて生活したいのです。そんな社会が実現される為には、意識改革をしなければなりません。常日頃の行動の中でさりげなく着実に社会に浸透させていくことの大切さをひしひしと感じます。子供扱いして平気な体質は、何処からくるのでしょうか。誠に不思議な現象です。

重度障害者と家族の関係

重度障害者と家族の人間関係を私なりに少し考えて見ました。障害者の場合、物理的な条件から二十歳をとうに過ぎても、親離れをすることがとても難しいケースが珍しくありません。家の両親も御多分に漏れずその傾向が強く、私自身の自己決定により行動を起こそうとする時、妨げになることが往々にしてありました。しかしながら、わが家の場合は私の性格が一度言い出したら聞かない頑固な性格で、しつこく言い続けるので、根負けする形で自分のしたい生き方を通してまうことが可能になっているのです。

しかし、これも本当に私を認めてやらせているのではなく、「やってみればやっぱり自

分にはできないと思って諦めるだろう」と考え、やらせて見ているのです。おとなしい障害者や、家族に遠慮のある人たちの場合、自分の意思を抑えることがある意味で美德であり、生きるための術だと思って生活している人が多い様に感じられます。確かに、家族に頼らなければ生活が成り立たない部分が多く、家族に気を使い家族の都合に左右されやすいのは当然のことだと思います。しかし、そのことによって社会性を芽生えさせることが非常に困難になり、障害者自らが親なき後、生き抜く上で大変な壁を作ってしまう。人とのコミュニケーションや人間関係が極端に作りづらかったり、当然できるはずの日常生活行為が、障害による物理的困難さ

以外の要素で大きなつまずきを持ってしまいう例が少なくありません。社会生活力は養っていかなければ身につかないものだと、最近、身をもって実体験の中から痛感しています。その意味では、まだまだ私も同じ年代の女性と比べれば欠落したり、身体的障害と相まってできていない部分が多いので、余り言えないと思いますが、親子である一定の年齢が来たら努力をし、自己決定のできる環境を作っていく必要性がすごくあると思います。

それは、どんな些細な経験でも構わないのです。私がここで言いたいのは、親子の精神的な距離の問題を言いたいのです。障害者の年齢が上がれば、親子関係もそれなりに変化していったって当然です。親は何かあったらどうするかということを中心に気にします。勿論、最大限の配慮や注意はしなくてはなりません、その上で何かあった時には人間誰しも仕方がないことだと思います。その辺をどう理解するかによって、障害者の生き方も大きく違って来ると思います。兄弟との関係もなかなか難しいものがあると思いますが、自然な関係を作れる様に、障害者ばかり

社会性の欠如

この項目については、自分も話しながら耳の痛い事がたくさんあるので、あまり話すべきでもないなあとと思っています。前述した家族やその人が長年置かれてきた社会的環境とも密接な関係があると思いますが、社会生活力がなかなか育っていかないという実情があります。例えば私は二十歳頃まで、「家の目の前を走っている京成電車は私には乗れないもの、乗ってはいけないもの」のような気がしていて、ほとんど記憶にないほど、乗った事はありませんでした。

ですから、最初に乗りに始めたころは路線図もわからない、切符の買い方も知らない、というありさまでした。私は幸い早い時期にそれではいけない、失敗しても社会の人々と

りを過保護に育て過ぎる傾向をできるだけやめる様にすることだと思います。それでも兄弟は小さな時から我慢をすることがどうしても多くなってしまふものだと思います。そこを障害を持つ人間が心にとめ、さりげなく配慮しながら生きていくことが良いのではないかと推測されます。結婚問題では益々複雑になりますが、少なくとも兄弟の心の負担を考慮し、具体的に障害を持っていても、私は私でこの様に生きて行くという方向性を示す事で、お互いの好ましい生き方を追求していく積み重ねが大切だと私は考えています。

家族というものは、障害を持った人を一人の大人として認め、尊重することは、いつまでも不憫さを感じていて難しいのが世の常です。ですから自分はこんな事を日々考えていて、こんな事を少しずつ実行したいと言う事を態度で表し、第一の協力者に親自身を育てて行くという地道で根気のいる作業を、障害者自らの手でしなくてはなりません。その土壌の上によりよい生き方の道筋が、うっすらと見えてくる様な気がします。

ふれ合って、普通に生活していけるようになりたいと思い、意識的に行動をし始めましたので、今では大分普通の人と同じような行動が、物理的困難さ以外の部分で可能になってきました。多くの仲間を見ていると、三十になっても四十になっても、こういっては何ですが考え方や行動が、一人の大人としてのものになってこない現状を目の当たりにします。こういった集団行動、社会的適応力の向上をどういうプロセスを踏んで養っていくべきなのかいつも考えています。脳性麻痺者の場合、社会経験不足が大きな問題だと思います。私も今現在の仕事の中で、事務的な仕事をしなければならぬ時、社会適応力のなさを感じます。やりたくないから逃

げているのではないのですが、やらなければならぬ事の主旨はわかっている、手段がわからない。数字を見るとただで頭血が上り、説明されている事が頭に入って来ないなどの事があり、私は自分でこの様な現象を、やはり障害の一部なのではないかと判断し、その部分については劣っていても仕方がないのだと悟るようにしています。周りの人からは、できないと思っているからできないとか、やりたくないからできない、と言っているように思われ、大変つらい思いをします。人の社会適応能力を測る時、社会生活の経験不足を原因とする能力不足でその人が社会生活力が低いのか、もっと根本的な障害の一部としての欠損により努力してもできないのか見極めてものを言い、その人が本当に困難な部分はできる人がやる。それはサボっている事とは決して違うという事を

認識して、障害者の社会適応力の問題を論じて頂きたいなあと思います。本当に努力しても不可能な部分でつまづいている時は、その本人がそのことができないという事を一番気にし、じれったく思っているのです。そこを人から責められるとすべてがいやになってしまい、別の分野でなら可能性がたくさんあるのに、それを見いだせないまま自分は大めな人間だという劣等感だけが残り、何も進まなくなってしまう。

福祉の現場に携わる皆さん、思いこみではなく、その人が本当に何ができて、何ができないのか、判断する目を持って、日々障害者と接して下さい。あなたの気づかないところで無神経に使われた一言が、意外に社会性を欠如させる原因になっているかもしれません。

カンパのお礼

前号以降、以下の皆様より温かいカンパをいただきました。厚くお礼申し上げます。(順不同)

《個人》山下 靖典様	佐久間 良夫様	川嶋 徳人様	大越 きよ様
木俣 麗様	安永 和子様	杉田 久美子様	清水 光明様
林 静誠様	伊藤 秀男様	三堀 八重子様	三堀 恭子様
三堀 昇様	塩谷 克己様	桜井 きみ代様	桑折 勇一様
千葉 満様	中山 洋子様	野中 真由美様	石栗 利宏様
菅原 泉様	杉田 秀雄様	渡辺 由美子様	塩野 剣土様
山村 豊様	向井 徳豪様	国生 美南子様	松井 せい様
竹内 笑様	瀬能 義辰様	福本 三之助様	永山 美子様
小川 里様	渡辺 慶子様	松平 敏子様	田嶋 早苗様
岩瀬 廣様	増田 高子様	阿部 正勝様	三浦 勝弘様

街頭カンパ

《団体》

国際ソロプチミスト船橋

日本労働組合総連合会(前号未掲載分)

<編集後記> 年が変わったからといって、現実には何かが変わるわけでもないのに、時間に区切りをつけて一種の気分転換を図ろうとするのは人間が身につけた生活の知恵でしょうか。

それにしても、隙間だらけの事務所は寒いなあ。

発行所 東京都世田谷区砧6-26-21

障害者定期刊行物協会

頒価 100円